

マルコ福音書における癒しと救い： 物語批評の視点から

河野克也

はじめに

病と癒しの問題を新約聖書の視点から考察しようとする場合、多くの人の病を癒し、悪霊を追放した奇蹟行為者としてイエスを描く福音書の記述を避けて通ることはできない。とりわけ、その前半部分においてテンポよく癒しと悪霊追放を物語るマルコ福音書は、われわれの考察にとって極めて重要である。特に、癒しの記事においてしばしば強調される信仰の問題、また福音書後半における癒しの不在の問題、そして、後半の主題である十字架との関わりなど、マルコ福音書は多くの重要な課題を投げかけている。そこで本稿では、マルコ福音書において癒しがどのような位置づけを与えられているのか、物語批評の視点から分析を試みたい¹。

¹ マルコ福音書の物語批評による分析としては、『日本版インターパリテイション』26号「特集—マルコ福音書—」(1994年)掲載各論文の他、挽地茂男「イエスの弟子たち—マルコ福音書における『弟子』の文学的機能をめぐって」(『日本の聖書学1』、ATD・NTD聖書註解刊行会、1995年、67-122頁)、太田修司「百卒長のアイロニー—マルコ15章39節と物語批評—」(『日本の聖書学4』ATD・NTD聖書註解刊行会、1998年、55-84頁)、同「文学批評—物語批評と読者反応

I. マルコ福音書における癒し：概観

マルコ福音書において、癒しの記事は悪霊追放を含めて20箇所ある²。

1、1：21-28	汚れた霊に憑かれた人	悪霊追放
2、1：29-31	シモンの姑	癒し：熱
3、1：32-34	多くの人	悪霊追放・癒し (要約的報告)
4、1：39	ガリラヤの会堂で	悪霊追放 (要約的報告)
5、1：40-45	重い皮膚病	癒し：皮膚病→本人の信仰
6、2：1-12	中風の男性	癒し：中風→友人の信仰／罪の赦し
7、3：1-6	手の萎えた人	癒し：手→命を救うこと
8、3：7-12	多くの人	悪霊追放・癒し (要約的報告)
9、5：1-20	ゲラサ人	悪霊追放
10、5：24-30+35-43	ヤイロの娘	癒し：蘇生→信仰の要請
11、5：25-34	衣に触れる女性	癒し：出血→本人の信仰
12、6：1-6	ナザレのごく少数の人	癒し (要約的報告)
13、6：7-13	十二弟子の宣教派遣	悪霊追放・癒し (要約的報告)
14、6：53-56	ゲネサレトの病人	癒し：衣の裾 (要約的報告)

批評を中心に」(『現代聖書講座』第2巻、日本キリスト教団出版局、1996年、第二章、233-250 [特に247頁以下]、382-383頁 [参考文献])がある。

² 同様のリストは、太田修司「いやしと十字架—マルコ福音書の贖罪思想」(『アレティア』38号 [2002年9月] 16-21頁) 16頁、フランク・J・マテラ「『他人を救ったが、自分自身を救うことができない』—マルコの奇蹟物語への文学批評的視点—」(山田耕太訳、『日本版インターパリテイション』21号 [1993年5月] 24-46頁) 26頁に見出せるが、太田もマテラも、癒しばかりでなく、自然的奇蹟も含めた奇蹟物語のリストとして提示している(詳細において、要約的報告や短い言及など、数え方に多少の違いはある)。悪霊追放は病気の癒しと区別することもできるが、本稿では「癒し」を、悪霊追放も含めた広い意味に理解して考察を進める(太田もマテラも同様)。両者を厳密に区別した注目すべき論考としては、藤田宏紀「マルコ福音書は『病者』に対して何を語るのか—特定の読者に対するテキスト効用論的分析の試み—」(『日本の聖書学3』、ATD・NTD聖書註解刊行会、1997年、46-78頁)がある(特に54頁を見よ)。

15、7：24—30	ギリシア人女性の娘	悪霊追放→女性（母親）の信仰
16、7：31—37	二重苦の男性の癒し	癒し：耳と舌
17、8：22—26	二段階の癒し	癒し：目
18、9：14—29	汚れた靈に憑かれた子	悪霊追放→信仰の要請（父親）
19、9：38—41	弟子仲間以外の癒し	悪霊追放→イエスの名／許容
20、10：46—52	盲目バルティマイ	癒し：目→本人の信仰／弟子となる

このうちイエスによるものが18箇所、イエス以外の人物によるものが2箇所あるが、イエス以外による癒しの1箇所は宣教派遣された十二弟子によるもので（6：7—13 [13]）、もう1箇所は十二弟子の仲間でない人物によるものである（9：38—41 [19]）。マルコ福音書は、ペテロの主告白（8：27—30）を境に前半と後半に分けられるが、癒しの記事は福音書の前半に17箇所、後半に3箇所と、明らかに前半に集中している³。また、20箇所のうち6箇所が「要約的報告」と呼ばれるものであり（3、4、8、12、13、14）、具体的な出来事の詳細な記述を含まない⁴。具体的な出来事が語られる14箇所において注目すべきは、その半数の7箇所において、癒しと信仰との明確な結びつきが強調されていることである（5、6、10、11、15、18、20）。どのような信仰が要請されまた称賛されているのかが、重要な課題として浮かび上がる

³ この著しい不均衡は、従来の様式史的・編集史的分析においては、奇蹟物語と受難物語という二つの異なる伝承として説明され、その関係が問われた（藤田、前掲論文、49頁）。これに対して物語批評においては、後述するように、この不均衡の文学的機能が（内著者）マルコの統一的視点から説明されることになる。それは、病を癒す者イエス（前半）と十字架の受難を引き受けるイエス（後半）とが、マルコにおけるイエスの人物造形（characterization）においてどのように統合されているか、という問い合わせとなる。ちなみに藤田論文は、この「奇蹟行為者キリスト論」ないし「榮光の神学」（奇蹟物語）と「十字架の神学」（受難物語）との関係を、文学批評（読者を「病者」に限定した上での読者反応批評的な分析）の視点から解明する試みである（68—70頁参照）。

⁴ 「要約的報告」の概念は、大貫隆によるものである（『マルコによる福音書』I、日本基督教団出版局、1993年、および太田修司「百卒長のアイロニー」83頁、注14参照）。

ってくる。

ここで癒しに関する用語を確認しておくと、マルコでは「癒す」という意味の動詞として、セラペウオー（θεραπεύω）とイアオマイ（ἴαομαι）の二つが使われており、セラペウオーは5回（1：34、3：2、10、6：5、13）、イアオマイは1回（5：29）、それぞれ使われている⁵。この他「清める」という意味の動詞カサリゾー（καθαρίζω）が、皮膚病の人の癒しの記事において3回（1：40、41、42）使われている⁶。この三つに加えてさらにもう一つ、「救う」という意味の動詞ソーザー（σωζω）が、物理的な命に関わる癒しの意味で使われている（3：4、5：23、28、34、6：56、10：52）⁷。ソーザーは、物理的な命を超えた宗教的次元での救いの意味でも使われており（8：35[x2]⁸、10：26、13：13[x2]）、さらに、十字架の場面では、両方の意味が重ね合わされてアイロニーを構成するなど（15：30、31[x2]）、マルコ福音書においては決定的に重要な役割を果たしている。アイロニーとは、「直接的あるいは表面的に言われていることと反対のことが意図されている修辞的表現

⁵ ちなみに、セラペウオーの用例は、5回のうち3章2節を除く4回が要約的報告である。原語での聖書検索には、オークツリー・ソフトウェア社のアッコーダンス（Accordance, 6.9.2 [OakTree Software, Inc.], 2006）を使用した。

⁶ カサリゾー自体はマルコ中4回使われているが、第4番目の用例は7章の清淨規定・食物規定をめぐる論争においてであり、そこでは、イエスが「すべての食物を清めた（清いと宣言した）」ことが記されている。

⁷ 一覧を示すと以下の通りである（太字がソーザーの部分）。

3：4（手の萎えた人：7）安息日に律法で許されているのは…命を救うことか、殺すことか。

5：23（ヤイロの娘：10）そうすれば娘は助かり、生きるでしょう。

5：28（衣に触れる女：11）この方の服にでも触れれば癒していただける

5：34（衣に触れる女：11）娘よ、あなたの信仰があなたを救った。

6：56（ゲネサレトの病人：14）[イエスの衣の裾に]触れた者は皆癒された。

10：52（バルティマイ：20）行きなさい。あなたの信仰があなたを救った。

⁸ 後段において詳細に論じるが、正確には、8章35節で2回繰り返されるうちの前半は、この世での物理的な命と理解すると、後半の永遠の命へと連なる命の逆説がよりよく強調される。

（反語）」と定義されるように⁹、ここでは文学において用いられる修辞的な技法を指すが、特に物語批評においては、内的著者から内的読者へのメッセージの伝達を分析する上で非常に重要な概念である。そこで、マルコ福音書における癒しと救いに関して考察するにあたって、動詞ソーザーの用例においてアイロニーがどのように機能しているかを検討する必要がある¹⁰。

II. 物語批評による問題設定

物語批評は、1970年代にアメリカにおいて新約聖書学、特に福音書研究に導入され、80年代以降に大きな潮流をなし、現在では英語圏において中心的な方法論の一つとなっている¹¹。それまで支配的であった様式史や編集史と

⁹ 『最新文学批評用語辞典』（川口喬一、岡本靖正編、研究社、1998年）、3頁。

¹⁰ アイロニーの簡便な定義としては、『最新文学批評用語辞典』の項目（3-4頁）、および『コロンビア大学現代文学・文化批評用語辞典』の項目（234-235頁【ジョセフ・チルダース、ゲーリー・ヘンツィ編、杉野健太郎、中村裕英、丸山修訳、松柏社、2002年=第3版】）を参照されたい。マルコにおけるアイロニー全般については、太田修司「百卒長のアイロニー」に具体的な分析例を見出せる。後段において詳細に論じるが、ソーザー（救う）をめぐるアイロニー解釈の事例としては、太田の「百卒長のアイロニー」と「いやしと十字架」に加え、マテラの前掲論文がある（40-42頁）。

¹¹ 新約聖書学における物語批評については、『聖書学用語辞典』（樋口進・中野実監修、日本キリスト教団出版局、2008年）の項目「物語批評」（挽地茂男、354-357頁）の解説がわかりやすい。物語批評は、譬え物語など個別の伝承素材の構造主義的記号論的分析においては、もうすこし早い時点で導入されていたようだが、福音書物語全体の分析に本格的に導入されるのは70年代になってである。この時期の文献としては、ウィリアム・A・ビアズリーの『新約聖書と文学批評』（ヨルダン社、1983年【原書は1970年】）およびノーマン・ピーターセンの『新約学と文学批評』（教文館、1986年【原書は1978年】）が邦訳されている。この二冊の原書は「聖書学の基礎知識」という同じシリーズに入っている、それぞれにシリーズ編集者のダン・O・ヴァイア・ジュニアがまえがきを寄せているが、それらを日本語訳の訳者あとがきと読み比べると、歴史的批評的方法との距離感をめぐって、当時の日米の新約聖書学が置かれていた状況の違いが浮き彫りになっていて興味深い。

といった歴史的批評的方法が、個別の伝承とその生活の座の分析や、個々の伝承が大きな単元や福音書全体へと構成される編集の実態とその生活の座の分析を中心とする歴史学の営みであったのに対して、自覚的に視点を転換し、文書全体を、統合性のある物語として分析する文学的（あるいは文芸学的）な営みである。歴史的批評的方法がテクストの意味を、各伝承や編集作業に断片的に反映されている歴史的事実の次元でとらえようとするのに対して、物語批評では、テクストの意味はその物語がトータルに語り出す世界（物語世界）として、またその物語世界を通して読者が変革されるダイナミックなコミュニケーションとして理解される¹²。

歴史的批評的な研究に関しては、従来から断片化の問題が指摘されてきたが、物語批評では、この断片化を避けるために注意深い方法論的手続きが取られる。すなわち、テクストを自律した統体として扱い、著者から読者へのコミュニケーションのプロセス全体を、テクスト内部において分析する。このため、テクストの外側に存在する著者や読者は一旦方法論的に括弧に入れられ、その代わりに、テクスト内に記号化・内在化された存在である「内的著者」（implied author）と「内的読者」（implied reader）という概念が用いられる¹³。

¹² 物語批評において虚構性がどのように考えられるかという問題については、ピーターセンの『新約学と文学批評』巻末の宇都宮秀和による解説が優れている。「虚構テクストは、…現実を組み立て直して伝達するところにその機能がある」（前掲書、171頁、イーザーの引用）。

¹³ 物語批評では、歴史上の実在の人物（生身の人間）としての著者も読者も一旦括弧に入れて、あくまでもテクストから得られる情報によって構成される、そのテクストに固有の内的著者（あるいは「含意された著者」）また内的読者（あるいは「含意された読者」）として、分析を進める（従って、以下「マルコ」と表記する場合には、あくまでも内的著者としてのマルコを指す）。この対概念については、詳しくは『物語論辞典』の項目（85-87頁【ジェラルド・プリンス著、遠藤健一訳、松柏社、2004年=増補版】）および『聖書学用語辞典』の項目（259-261頁、挽地茂男）を参照されたい。この点が、様式史や編集史といった方法論と根本的に異なる物語批評の特徴である。しかしながら、そのテクスト自体が具体的な歴史の産物であることを否定しているのではなく、物語批評においても、時代背景などの的確な理解が不可欠であることは言うまでもない。

このようにテクスト内在的に行われる内的著者と内的読者の間のコミュニケーションの分析においては、物語の登場人物の描写や評価による人物造形 (characterization)、登場人物間の対立や軋轢 (conflict) を通して進展し、またそうした出来事の注意深い配置や物語の順序によって構成される筋 (plot)、さらに、様々な形で提示される内的著者の視点 (point of view) が詳細に論じられるとともに、内的読者の読み進むプロセスの累積的な効果もまた、注意深く検討される¹⁴。登場人物が知っている情報と、内的読者に知らされている情報とは必ずしも同じではなく、例えば、内的読者には物語の開口一番に提供される「イエス=神の子」との情報は、登場人物には（悪霊を別にすれば）誰一人知らされていない。このイエスのアイデンティティをめぐる問い合わせ、またその正しい理解の獲得という目標が、マルコ福音書のプロット（筋）を牽引している。また先に言及したアイロニーに関して言えば、登場人物と内的読者の知識のギャップによって、時として、自らの運命に無知な登場人物の言動が「状況のアイロニー」を構成することになる¹⁵。

¹⁴ 内的読者が内的著者の指示に従って物語を読み進めて行くことで、コミュニケーションが成立するのだが、その場合、内的著者がテクスト上に散りばめた様々な指標に忠実に従って読み進める読者を、「理想的な読者」(ideal reader) と呼ぶ（『最新文学批評用語辞典』286 頁、および、David Rhoads, Joanna Dewey, and Donald Michie, *Mark as Story: An Introduction to the Narrative of a Gospel* [2nd ed., Minneapolis: Fortress, 1999], pp.137f. 参照）。したがって、物語批評のゴールは、著者が想定してテクスト内に記号化した内的読者となって、すなわち、内的著者にとっての理想的な読者として物語を読むことである、ということができる。この内的（理想的）な読者として読み進む行為の分析は、読者反応批評の場合とは厳密に区別される。後者の場合の読者は、内的著者とは区別される独立した人格を持つのであり、場合によっては内的著者の指示や視点に対して、独自の視点から抵抗することもできる。読者反応批評においては、そのような読者を「抵抗する読者」(resisting reader) と呼ぶ（Robert M. Fowler, “Reader-Response Criticism: Figuring Mark’s Reader,” in *Mark & Method: New Approaches in Biblical Studies*, ed. by Janice Capel Anderson and Stephen D. Moore [Minneapolis: Fortress, 1992], pp. 50-83; here, pp. 73-81）。

¹⁵ この場合の「状況のアイロニー」(situational irony) は、より正確には「劇的アイロニー」(dramatic irony) に分類されるものであり、古典的な例としては『オイデプス王』の物語が有名である（『現代文学・文化批評辞典』234 頁）。マルコ

こうした物語批評の手続きに従って、以下にマルコ福音書における癒しと救いの問題を整理してみると、第一に、物語の主人公であるイエスと、彼を取り巻く様々な登場人物 (characters) の人物造形が重要となる。癒しを求めてイエスの周りに集まつくる群衆や、癒しに際して信仰の応答をする脇役たち (minor characters)、イエスの癒しに驚きながら旅路を共にしつつもイエスの神の子としての真の使命を理解し損なう弟子たち、またイエスによる癒しを快く思わず、イエスを拒絶し、殺意を抱く宗教指導者たちなど、癒しをめぐる個々のエピソードにおいて、登場人物はどのように人物造形され、どのようにイエスに応答しているのか、いくつかの構成上重要なエピソードを通して分析を試みる。

第二に、登場人物間の相互関係が重要なテーマとして浮上する。主人公イエスに対して宗教指導者たちが示す抵抗は、弟子たちをも巻き込んで様々な場面で進展（深刻化）しながら、ついに十字架においてクライマックスに達する。この宗教指導者との対立 (conflict) もまた、癒しをめぐる重要なエピソードを通して分析を試みる。

第三に、十字架の場面でのアイロニーを考察する。そこに至るまでの多くの癒しの記事を背景に、「他人を救ったが自分は救えない」との罵声を浴びせられてなお、十字架上にとどまるイエスを通して、マルコは何を語ろうとしているのか。福音書前半の癒し主イエスという人物造形は、この十字架にお

では、例えば、ペテロがイエスをメシア（キリスト）と告白した直後に、受難予告を受けてそのイエスを叱責した場面も、最後の晩餐の席で力強くイエスを見捨てないと宣言した場面も、明らかにアイロニーを構成している（太田「百卒長のアイロニー」68-71 頁）。厳密に言えば、14 章 27-31 節の時点ではまだアイロニーは成立（完成）していないが、二つのペテロの宣言の間に置かれたイエスの予告（30 節）のゆえに、内的な読者は後の否認（14: 66-72）を予期するよう促されており、それゆえ、アイロニーが予期的に成立していると言いうるであろう。それは、マルコの人物造形上の設定においては、イエスがペテロよりもかに信頼に足るからであり、さらには、ペテロが 8 章でイエスを叱責した際に、逆にイエスから「サタンよ、退け」との厳しい叱責を受けてすでに醜態を晒している、というプロット上の累積によっても、マルコが内的な読者の判断を導いているからである。